攻防の状況から学ぶ剣道授業の実践的研究
—「剣の理法」の視点を中心に—

牧野　祥子

A Practical Study of the Kendo Class to Learn from Situation of the Offense and Defense
— The viewpoint of "Ken no Riho" —

Shoko MAKINO

1　問題と目的

平成29年告示の中学校学習指導要領の剣道では，第1学年及び第2学年で「打ったり受けたりするなどの簡易な攻防をすること」，第3学年で「相手の構えを崩し，しかけたり応じたりするなどの攻防をすること」[1]と示されている．このことから，剣道授業の中心的な指導内容は「攻防」であると解釈される．また，中学校学習指導要領解説では,「攻防」を行う場を,「自由練習」や「簡易な試合」と挙げている[2]したがって,「攻防」は，相手と対峙し，互いに攻撃や防御し合う条件で行われるものであると考えられる．

また,「攻防」の学習をする意義として，①剣道の起源が戦いであり，現代ではそれが試合に置き換えられていると考えられること ②剣道授業の技能の目的は「攻防」することであり，技は「攻防」をする中でつくり出されていく可能性があると考えること ③剣道の文化性・精神性は，実体験を通じて学ばれると考えることの3点を挙げる．

しかし,学校現場で行われている剣道授業では,試合の状況の中で行われる「攻防」の学習よりも,技や動きの習得が学習の中心となり，試合をする時間がなかったり，試合をしてもその時間や経験が少なかったりし,「攻防」の学習に迫ることができない様子が見受けられる．このような「攻防」の学習ができない剣道授業を問題として捉えている．

そこで，本研究では,「攻防」が学習の中心的内容の授業実践をすることで,「攻防」の状況から,子どもに学ばれている内容にはどのような可能性があるあるかを明らかにすることを目的とする．そして,その視点として「剣道の理念」を用いる．「剣の理法」は「刀法」「身法」「心法」に分けて考えられるとされ[3],「剣道の原理・原則」を意味するものであると言われている[4]．このことから,「剣の理法」は剣道そのものを表したものであると捉えられている.この視点を中心に,「攻防」から学ばれる剣道の内容を考えていきたい．

2　研究Ⅰ　－N中学校の実践－

2-1　研究方法

「攻防」中心の剣道授業を設定した剣道授業をN中学校で実施し，子どもの様子をビデオカメラで撮影する．記録されたVTRのうち，試合や練習試合などの「攻防」をしている場面で対人的技能や基本動作が出現している状況に着目し，これらが学ばれている可能性について分析する．そして「攻防」の学習に迫るための基本動作・対人的技能・試合の在り方を考察する．

2-1-1　実践内容・対象

N中学校で行われた実践内容を表1に示す．

表1　N中学校の実践内容

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
基本動作習得					試合						

実践対象者は中学2年生男女，授業者は第1時を筆者，第2時以降をA教諭（教職12年目）が行った．

2-2　結果と考察

まず，N中学校の実践の試合で出現した対人的技能を示す．

図1-1～1-4はAが胴を打つ様子である．図

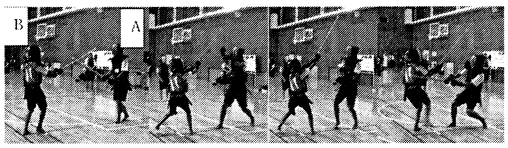

図1-1　図1-2　図1-3　図1-4

図1　手元を上げさせて胴

1-1と図1-2で，Aは中段の構えから，1歩前に出ながら竹刀を振り上げ，BはAの動きに合わせるようにして，手元を上げている．図1-3と図1-4でAは，Bが手元を上げ隙となった胴を打っている．この様子から，Aの竹刀を振り上げた動きは，相手に手元を上げさせるためのものであったと捉えられる．

図2-1　図2-2　図2-3　図2-4

図2　隙をつくらせて面

図2-1～2-4はAが面を打つ様子である．図2-1で，中段に構えた合った状態から，図2-2でAは竹刀を振りかぶり，Bはそれに合わせるようにして手元を上げている．図2-3でAは1歩前に出ながら左肩の方に竹刀を振りかぶっている．それに対しBは，竹刀を右斜め下に降ろして首を傾けている．図2-4でAは竹刀を振り下ろし，Bの面を打っている．この様子からAの前に出ながら，一旦竹刀を左肩の方に振りかぶる動きは，相手が防御するタイミングをずらすためのものであったと考えられる．

このほかにも，体の左側で竹刀を回すように振りかぶり，タイミングを崩して面を打つ動きや，面を打って相手に手元を上げさせて胴を打つという「面胴」の二段技につながる動きが見受けられた．これらの動きは，教師が教えたものではないことから，試合の中で子どもが自発的に発揮したものであると考えられる．このことから，試合経験をある程度多く積ませることで，試合の状況に応じた対人的技能を子どもは自得していくことができると考える．

次に試合で出現した基本動作の問題点として，声・打ち・踏み込みの一致（以下，「気剣体一致」とする）していない動きがあった．図3-1～3-4はその一例である．

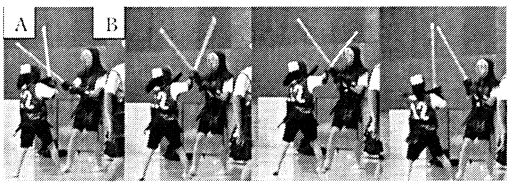

図3-1　図3-2　図3-3　図3-4

図3　手元だけの打ち

図3-1～3-4はAが面を打つ様子である．図3-3でAがBの面を打っているが，Aは足を動かさず，手元だけで面を打っている．このような「気剣体一致」しない動きが現れたのは，基本動作習得段階に原因があると考える．本実践では，基本動作習得段階で教師が「面打ち」「小手打ち」「胴打ち」「面体当たり引き技」などの複数の技を教え込んでいた．そのため，子どもたちは動きの理解・習得ができないまま，次々と課題が与えられ，動きの習得が不十分となっていた．

このことから筆者は，基本動作習得段階で技を教え込もうとするのではなく，試合のための「準備」と捉え，「気剣体一致」の習得をねらうことで，剣道としての一定の様式のある試合をすることができると考える．

2-3　まとめ

N中学校では「攻防」中心の剣道授業を計画し，試合経験を多く積ませた．試合では複数の対人的技能が見受けられた．このことから，試合経験をある程度多く積ませることは対人的技能自得の可能性があることが示唆された．また，基本動作の問題点として，「気剣体一致」しない動きを挙げた．そこで，基本動作習得段階を試合のための「準備」捉え，「気剣体一致」の習得をねらうことの有効性を考えた．

3　研究Ⅱ　－H中学校の実践－

3-1　研究方法

「攻防」の学習に迫ることを目的とした授業を実施し，子どもが考えたことや気づいたことから，学ばれている内容の可能性を考察する．

3-1-1　実践内容・対象

研究Ⅱでは，研究Ⅰで考察された内容を参考に，「準備」→試合と捉え，「準備」では「気剣体一致」の習得を試みた．そして，単元の半分以上に試合を設定し，「攻防」する機会を確保した．．実践した内容を表2に示す．

表2　H中学校の実践内容

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
A組	準備				試合						
B組	準備					試合					

対象者は中学2年生A組とB組2クラス．授業者は筆者．授業時数は，A組は10時間，B組は11時間であった．

3-1-2　分析方法

分析は，実践対象者の「剣道ノート」への記述を用いる．「剣道ノート」とは，毎時授業終了後に子どもが授業で考えたことや気づいたことなどを記述するノートである．これを子どもの考えが反映されたものと捉え，分析の対象として扱うこととした．

分析の手順は①上位カテゴリーの設定と分析②下位カテゴリーの設定と分析とする．

上位カテゴリーの「攻防」は学習指導要領において剣道の技能が「攻防すること」[5]であることから，「精神」は解説に武道の特性として「我が国固有の文化」[6]が挙げられていることから設定した．

上位カテゴリーの定義と例を表3に示す．

表3　上位カテゴリーの定義と例示

カテゴリー	定義	例示
攻防	試合での攻防に関する記述	「相手が打ってきたときによけながらうつといい」 「面にみせかけてどうをうつ」
精神	剣道の精神性・文化性に関する記述	「心をおちつかせる」 「剣道は自分との勝負」

下位カテゴリーは，上位カテゴリーに分類した記述を言及対象ごとに区切り，「KJ法」[7]を参考に同意と考えられる内容でまとめ，下位カテゴリーを設定した．

3-2　結果と考察

3-2-1　上位カテゴリーに分類した結果と考察

A組及びB組の「剣道ノート」の記述内容を，設定したカテゴリーで分類した結果を表4に示す．

表4　各カテゴリーの件数

カテゴリー	A組	B組
攻防	63	118
精神	24	26

この結果から，子どもたちは，「攻防」が中心的内容の剣道授業を通して，試合での攻防の仕方や剣道の文化性・精神性について何らかの学習をしていることが示唆される．

3-2-2　下位カテゴリーに分類した結果と考察

「攻防」の上位カテゴリーに属する記述は20の下位カテゴリーに分類し，「精神」の上位カテゴリーに属する記述は11の下位カテゴリーに分類した．そして，各下位カテゴリーを「剣の理法」を視点に，学ばれている内容にはどのような可能性があるか考察した．それを表5と表6に示す．

表5　「攻撃」に属する下位カテゴリー一覧

カテゴリー名	刀法	身法	心法	その他
難しい	○	○		
声で威圧			○	
後退する		○	○	
相手との距離		○		
他者について	○	○		
どこ（打突部位）を打つか	○			
速さ	○	○		
守り		○		
積極的な攻め	○	○	○	
相手より先	○	○	○	
相手が打とうとするところを打つ	○	○	○	
相手が打った後に打つ	○	○	○	
隙があるところを打つ	○	○		
隙をつくらせる	○	○	○	
隙	○	○	○	
守りと攻め	○	○	○	
視線		○	○	
相手の動きを読む			○	
考えること			○	
心との関係			○	

下位カテゴリーのうち，筆者が興味深いと感じた例を以下に示す．

表６「精神」に属する下位カテゴリー一覧

カテゴリー名	刀法	身法	心法	その他
強い相手に対して			○	
恐怖心			○	
落ち着く			○	
気持ちで攻める			○	
体が自然に動く			○	
声と気持ちの関係		○	○	
自分との戦い				○
自己の変化				○
相手を打つこと				○
礼				○
剣道への関心				○

「相手が打った後に打つ」に属する記述には「相手が打った直後油断しているすきに，どうをうつ！」「相手が打ってきたときはよけながら打つといいと思った」「相手に打たせてから打つと一本をとりやすいと思いました」などがあった．これらは技の尽きた処」や「受け止めた処」[8]につながる考えであることから,「刀法」「身法」「心法」全てに関連していると考える．

「守りと攻め」に属する記述には「守りながらせめれるようにしたい」「竹刀でかまえているときにこてやどうを打たれてしまったので，守っているときも相手のことをよく見て打ちたいです」などがあった．これらは「懸待一致」すること[9]を含意していることから,「刀法」「身法」「心法」全てに関連していると考える．

「落ち着く」に属する記述には「冷静に相手のあいているところをうてるようにしたいです」「心をおちつかせる－集中することができて，しっかりうてる」などがあり,「平常心」や「不動心」[10]につながる考えであることから,「心法」に関連していると考える．

「相手を打つこと」に属する記述には,「痛くならないようにと思って力を弱めてしまいました．それは自分のためにも相手のためにもならないんだなと思いました.」「他人を打つというのは，心が痛むような気もするけれど剣道の楽しみが増えたと思います」などがあった．これらは「武力」と「暴力」の違い[13]を認識し，剣道の精神性につながる考えであると捉えられ,このことから「その他」に関連すると考える．

3-3　まとめ

「剣道ノート」の記述を「攻防」と「精神」の上位カテゴリーに分類した結果から，子どもたちは試合での攻防の仕方や剣道の文化性・精神性について何らかを学習していることが示唆される．

そして，下位カテゴリーに分類し,「剣の理法」を視点に学ばれている内容の可能性を検証したところ,「攻防」に属する下位カテゴリーは,「刀法」「身法」「心法」に関連があると考えた．このことから，子どもたちは「攻防」の中で,「剣の理法」に関連する内容が学ばれている可能性があると考えられた．

「精神」に属する下位カテゴリーでは,まず,「身法」「心法」に関連があると考えられるものがあり，これは「敵と対したときの心の動き」[11]であると考える．「その他」に関連するものは「人格にかかわる精神性」[12]につながる記述であると捉えられる．これらはいずれも剣道の精神性に関わる内容であると考えられる．

以上のことから,「攻防」の状況から，子どもたちが考えたことは,「刀法」「身法」「心法」の要素と関連づけられ，試合を通して，子どもたちにとっての「剣の理法」を学んでいる可能性があると考える．また,本実践を通して子どもたちは,剣道の精神性に関わる内容を悟っていたと考えられる．

4　まとめ

試合での「攻防」の状況から，子どもに学ばれている内容の可能性を明らかにすることを目的とした．

研究Ｉでは,「攻防」中心の授業実施をしたところ，試合で複数の対人的技能が出現した．このことから，試合経験をある程度多く積ませることは，対人的技能が自得される可能性があると考えられた．

いっぽう，基本動作における課題の例として,「気剣体一致」となっていない動きがあった．この様子から，基本動作習得段階を試合ための「準備」と捉え，基本を「気剣体一致」の習得をねらうことで，試合の時間と機会を保障し，一定の様式のある「攻防」ができるようになると考えた．

研究Ⅱでは，研究Ⅰで考察された内容を参考に「攻防」が中心的内容の剣道授業を実践した．そして分析は，子どもの「剣道ノート」の記述を対象とした．記述内容を分類し，これを「剣の理法」の視点に学ばれている内容にどのような可能性があるか考察した．

その結果，剣道授業の試合における「攻防」の状況は，子どもたちにとっての「剣の理法」や剣道の精神性が学ばれている可能性があることが示唆された．

本研究を通して，剣道の技能・精神・文化を学習するためには，試合での「攻防」の状況は必要不可欠であること，そして，子どもたちは「攻防」の状況から，「剣の理法」をはじめとする剣道の核心に迫った内容を学ぶ可能性があることが考えられた．

5　引用・参考文献

1）文部科学省：中学校学習指導要領，pp.118-123，2017
2）文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編，pp.149-159，2017
3）小川忠太郎：剣道講話，p.14，体育とスポーツ出版，2014
4）日本武道館:日本の武道，p.152，日本武道館，2007
5）上掲書 1）pp.118-123
6）上掲書 2）p.149
7）川喜多次郎：発想法 改版，pp.68-118，中公公論新社，2017
8）佐藤忠三：剣道の学び方オンデマンド版，p.151，体育とスポーツ出版，2003，
9）高野佐三郎：剣道，中村民雄訳，p.179，島津書房，2013
10）堀籠敬蔵：剣道の法則，pp.202-211，体育とスポーツ出版，2002
11）酒井利信：英訳付き 日本剣道の歴史，p.26，スキージャーナル，2010
12）前掲書 11）p.26

（指導教員　森　　勇示）